

令和4年1月

池田亮二さんは、世の中の出来事を毎日一枚の絵にお描きになって二十五年！「一日一枚ニュースな絵手紙」と名付けられたアートのうち、去年の三六五枚の中から九枚を厳選し、令和三年を総括していただきます。

◆池田亮二 選 ～絵手紙で振り返る令和三年～

一、家畜小屋の人生？

外は春太平の世に座敷牢



この二年近く、電車にも乗らず、美術館にも映画館にもご無沙汰で、頭も体もなまってしまった感じです。不要不急はじっとしているというお達しのままに。しかも物を食うにも黙って食えと言われると、まさに家畜小屋の檻の中にいるわけです。

世の中、「駕籠に乗る人担ぐ人そのまた駕籠を作る人」というもたれあいできている。だから不要不急の人が駕籠に乗らないと、担ぐ人も作る人もこけてしまう。案の定、宿屋のおかみも居酒屋のおやじも泣きの涙です。

ホイジンガの言うごとく、人間は遊ぶ動物（ホモルーデンス）であり、遊び

(芸術、スポーツ、行楽、娯楽…)の中から文化も生まれる。そして遊びはまさに不要不急の行為なのです。おとなしく部屋にこもって、ITの画面とだけ向き合って、指先だけの仕事をする世界で満足する人はいないでしょう。

二、頑張り屋のご老体

わし老害かと長老春の長話

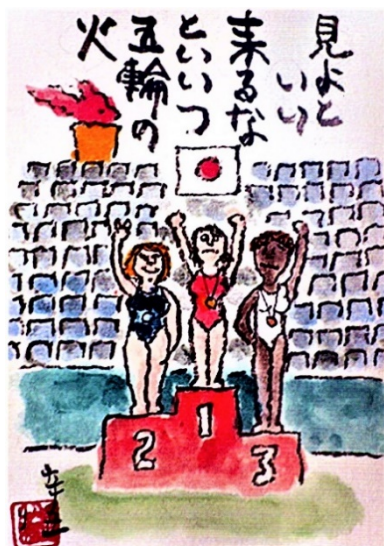


校長先生の長い訓話、結婚披露宴での来賓のスピーチなど、偉い人の牛のよだれのような長い話に悩まされた人は多いでしょう。

徒然草にも「大方聞きにくく見苦しきこと老人の若き人にまじはりて興あらむと物いひたる…」とある。経験豊かな年寄が若い人に頼りにされるのは結構だが、何時までもその経験ばかり言いつのっている老人は、うるさがられる。むしろ「もう忘れてしまったよ」ととぼけてしまう方が好ましいとも。そして、このうるさがられる長話の年寄は、たいがい男です。その老人が、「女は話が長くてくどい」などと言ったものだから、「何言ってるのよ」と総スカンをくらい、大切な会長の座まで追われてしまった。兼好さんは、大笑いしているでしょう。女性の特技にも長電話とか、井戸端会議の長評定とかあるようですが、この長老よりは、実害は少ないというべきでしょう。

三、スタジアムが泣いている

見よといい来るなといいつ五輪の火



元来、スポーツは、個人や団体に力比べや技比べをする遊びでした。それが世界中から一流の選手が集まって競うようになって、次第にそれぞれの国の威信をかけたメダル獲得競争になり、今やオリンピックは単なる遊びでなく、ビッグビジネスです。参加するのもアマチュアは押しのけられ、メダルの榮譽と高い収入を目指すプロの選手に占められ、国内外から大観衆を呼び込まなければなりません。

かくて巨大なスタジアムや選手村が整備され、観光地なども手ぐすねひいて千客万来を期待した矢先、にわかコロナ襲来で、無観客の開催となってしまった。大方の算盤勘定は大外れです。見ようによってはそれは本来の純粋な力と技を競うだけの遊びの世界に戻ったとも言えますが、空っぽのスタジアムは泣いている。祭が終わって、興行師はメダルの数を誇りつつも、招いた赤字に青息をついているようです。